神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

「自由人協会」とヘルバルト(2)：創設と入会

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉山, 精一 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/525

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

「自由人協会」とヘルバルト(2)

～創設と入会～

杉　山　精　一

「フィヒテは，今やイェーナの魂です…これほど深遠で精力に溢れた精神の人を，僕は外に知らない。」(1794年11月，ノイファー宛のヘルダーリンの書簡)[1]

1．はじめに　～18世紀末イエナの若者たち～

本稿の目的は，イエナ大学で結成された学生団体，「自由人協会」の創設に焦点をあて，教育学者ヘルバルト（J.Fr.Herbart，1776–1841）がその若き日，どのような精神運動の「場」にいたのかを明らかにすることにある。

舞台は1794年，ドイツの小都市イエナである。

この年は，奇跡の年と言われている。[2] 5月に新進気鋭の若き哲学者フィヒテ(J.G.Fichte，1762–1814）がイエナ大学に赴任し，新たな哲学の登場を予感させ，その講義はたちまち学生を魅了した。後にシェリング（F.W.J.v.Schelling，1775–1854），ヘーゲル（G.W.Fr.Hegel，1770–1831）と続くドイツ観念論の系譜が，ここに具体的な姿を現わし始める。フィヒテの講義を，若き詩人ヘルダーリン（J.Ch. Fr.Holderlin，1770–1843）も聴いている。[3]

この時期のイエナには，古典主義を代表する文学者シラー(J.Ch.Fr.v.Schiller，1759–1805)，ゲーテ（J.W.v.Goethe，1749–1832）がいた。1794年のクリスマスにはゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』の第1巻が出版され，[4] やがて，初期ロマン主義の指導者であったフリードリッヒ・シュレーゲル（K.W.Fr.v.Schlegel，1772–1829）も，フィヒテの影響を受け

ながら活発な文学活動を始める。[5]

フィヒテがイエナに赴任し，ヘルバルトが大学に入学した1794年とは，古典主義，初期ロマン主義，ドイツ観念論が交差しながら，新たな時代精神の登場を予感させつつあった胎動期であり，その主役を演じた知の巨人たちが，イエナにおいて横一線に並んだ年なのである。まさに他に例を見ない，ドイツ精神運動の黄金期であった。その渦の中心，若き哲学者フィヒテをとりまく若者たちの中に，ヘルバルトがいた。

フィヒテがイエナ大学に赴任した直後，彼を慕う若者たちが哲学・文学研究のアカデミックな会を立ち上げた。哲学，文学，政治など，人間性の向上に関わるあらゆるテーマについて，彼らは議論を重ねた。この会は1799年の無神論論争で，フィヒテがイエナを去るまで活動を続けている。まさに会の活動は，フィヒテの影響下で存続していた。

会の名称は，「自由人協会」(Literarische Gesellschaft der freien Manner. 以下「協会」と略記）という。[6]

メンバーの多くは，北ドイツの地方都市出身の若者たちであった。[7] 貴族階級出身者は少なく，穏健な中流階級出身の若者たちである。大学での学業を終えた後は地元に帰り，親の勧めに従って牧師か役人になるはずの若者たちであった。[8]

だが，彼らは目覚めてしまう。

フランス革命直後の新たな時代のうねりと，文学や哲学に触発された精神的高揚のただ中にあって，ただパンのために生きるのではなく，新たな時代を切り拓く自己形成のあり方を求めて，彼らは精神の放浪を続けた。

その最初のきっかけが，フィヒテとの出会いであった。メンバーたちは，フィヒテの強い影響を受けつつ，それぞれの歩むべき道を模索しながら，互いに影響し合っていた。

ヘルバルトと交流のあった友人だけを挙げても，次のような人物がいる。哲学の世界に生きたベルガー，ヒュルゼン，ムアベック。後に，外交官，政

治家として活躍したリストとシュミット。哲学ではなく文学の世界に生きるべき道を見いだした翻訳家グリース。最後までヤコービ主義を貫き，シェリング哲学と対決し続けたケッペン。ヘルバルトを，ペスタロッチーとスイスへ導いたフィッシャー。スイスアルプスで命を落とした才能豊かな文学青年エッシェン。ヘルダーリンと交流を重ね，放浪の果てに悲劇的な最後を遂げた詩人ベーレンドルフ。ヘルバルトに最初の哲学研究のきっかけを与え，圧倒的な存在感を放ち続けていたヒュルゼン。そのひとり一人が，若きヘルバルトの精神活動に影響を与えている。(9)

フリードリッヒ・シュレーゲルは，彼らが生きたこの時代を象徴するできごととして，次の三つをあげている。

「フランス革命，フィヒテの知識学，それにゲーテの『マイスター』，
これが時代の最大の傾向である。(10)」

この三つは，それぞれ政治，哲学，文学に現われた時代の徴表である。けれども，この時期のF.シュレーゲルは，すでにイエナで初期ロマン主義の運動を展開しており，その意味ではこれを四番目の傾向として挙げることができる。(11)

「協会」のメンバーたちは，その四つの精神が交錯する時代の空気を吸いながらイエナで学んでいた。ヘルバルトの友人であったリストは，この時代が若者たちに与えた影響を，後にこう語っている。

「それは青年たちの精神にとって危険な時代であった。この年は，最も危険な年であったのである。あらゆる方向からの強烈な刺激と危険が迫り，方向性を見失った両極端の生のはざまで揺れ動いていた。(12)」

彼らは問いかけていた。この不安な時代とどう関わり，未来を切り拓きながら自分の「生」を生き抜いていけばよいのか。

1794年，彼らはフィヒテの講義を聴き，古き時代を乗り越えていく新たな「人間の使命」の実現を，自らの課題として意識しつつ，集ったのである。

2.「自由人協会」の創設

（1） 前史

18世紀末，イエナ大学では様々な学生団体が活発に活動していた。[13] その自由闊達な雰囲気を，シュミットは後にこう語っている。

「イエナでは，興味ある講義が終わったすぐあとで，聴衆たちが群れをなして通りに集まってグループを作り，講義の内容を生き生きと議論するのは，日常的な光景であった。…教授の名前を知らなくても，散歩で出かけた際に出会って話しかけることもあった。」[14]

「協会」が創設される１年前の1793年，ヴィーラント（Wieland, Ch. M, 1733–1813）の主催する雑誌に，「K.Str.」という著者による「協会」と同名の「自由人協会」（Die Gesellschaft der freien Manner）と題する論文が掲載されている。[15] この論文と，1794年６月に創設された「協会」との関係については，残された資料からそのつながりを発見することはできない。ただ，この時期イエナでは，学生を中心とした様々な学生団体が成立しており，「協会」のメンバーたちは，こうしたグループから刺激を受けていたと考えられる。例えば，この論文で主張されている「自由」という名称の理念は，基本的には「協会」と共通している。論文はこう記している。

「私たちの会は，自由な人々が集った会である。人々は，自分自身が真実であると思うことを，我々の会で思いっきり語る素直さを持っている。それ故に，そのことで悪く言われる不安などないのである。私たちは―ひょっとして多くの会（Gesellschaft）でも同様かもしれないが―勝手気ままに下される他のメンバーの命令によってではなく，単に自由な意志によって受理される会則に従うのである。この長所が，私たちがこの名前を使うことになった正当な理由である。」[16]

この論文で証言されているように，1790年代イエナでは，学生たちが学部の専門領域に縛られず，あるいは同郷人的なつながりや秘密結社的な団体にとらわれない，学生たちの自由な雰囲気が土壌にあったのである。

（2） 創設　～シュミットの活動～

「協会」の創設にあたって，まず主導的な役割を演じたのはシュミット(Johann Smidt，1773–1857)である。当時シュミットはフィヒテのイエナ到着直後から，フィヒテ，歴史学者ヴォルトマン，哲学者のニートハンマーらとの会食に参加し，積極的にフィヒテの講義を聴いて，その直接的な影響下にあった。[17]

シュミットの日記[18]によれば，1794年６月１日の午後，友人マイスターの部屋に，様々な専門分野の学生10名が「文学的なクラブ，あるいは自由な人々の協会（Gesellschaft）の設立について相談するために」集まったと書かれている。[19]

ただ，後年シュミットは「ヘルバルトの思い出」（1842）の中で，「協会」の成立が「1794年の春，フィヒテの到着の少し前のことであった」と述べている。[20]だがフィヒテのイエナ到着は，1794年５月18日であり，日記の「６月１日」の記述とは若干の誤差がある。またシュミットは，創設に関わった学生として12名の学生を挙げているが，これも日記と比較して事実関係に混乱がある。[21]

こうした微妙な「ずれ」は，何を意味しているのだろうか。シュミットの単なる記憶違いとも考えられるが，私見によれば，その原因には二つの理由が考えられる。フィヒテの前任者ラインホールトを慕っていた学生グループの存在と，シュミットの交友関係の広さである。

フィヒテは，過激な学生団体との対立から，1795年夏学期にはイエナを離れて，オスマンシュタットに避難している。[22]そこで書いた弁明書に，前任者であるラインホールトがフィヒテに学生たちのことを託したことが記されている。

「私がイェーナの教職についたあとで，まもなく善を愛する学生たち……少なくとも私には善を愛すると思われる学生たちの中の若干の者が私を信頼した……かれらは……善を自身においてもまた他人において

も促進するために企画した願い，希望，計画を私に知らせてきた。……私はきわめて威厳のある人，ラインホールト教授の後任者であった。かれは学生たちの間に道徳的な善を惹き起こさせるきわめて厳しい熱意を示した，また彼はイェーナから出発する前に……あとに残された若い友達に私のもとで学ぶように言った。」（傍点筆者）[23]

ここで書かれている「企画した願い，希望，計画」とは，「協会」の創設であり，フィヒテがここで述べている「善を愛する学生たち」とは，おそらくシュミットとベルガー（Johann Erich von Berger, 1772–1833）である。[24]

「協会」創設のメンバーであるシュミット，ベルガー，マイスター，ポールトたちは，ラインホールトのもとで学びながら交流を持っており，フィヒテはイエナ到着後にラインホールトから，彼らの活動を引き継いだのである。

こうして，フィヒテの赴任以前に，すでにラインホールトを中心とする学生のグループが存在し，「協会」創設への土壌が固まっていた。フィヒテとの出会いによって，彼らの精神は「協会」創設へ向かうのである。

記憶の混乱のもうひとつの理由は，シュミットを中心にした学生グループの存在である。日記が明らかにしているのは，シュミットのきわめて広範な友人関係と，彼がこの時期，「協会」以外の学生団体の創設に深く関わっていた事実である。

注意したいのは，彼は1794年から翌年の初めにかけて，「協会」の創設を含め五つのアカデミックな学生団体の創設に関わっていることである。その活動は，それぞれ文学，神学，美的な領域にまで及んでいる。[25]

シュミットの記憶の「ずれ」は，彼を中心に活動していた複数の学生団体の創設と，そこに参加した友人関係の広がりを示唆している。注目すべきは，これらの学生団体に，シュミットを中心とする「協会」のメンバーが参加していたことである。

おそらく彼らは，フィヒテの影響下で，同郷人団体や秘密結社とは異なるアカデミックな学生団体の創設を模索していた。1794年，彼らは自由な精神

活動を具体化し，そのよりどころとなる新たな活動の場を求めていた。

「協会」の会議録には，文学や哲学的テーマについて議論を深めながら，社会や人間性の向上に向けて活発に意見交換する彼らの姿を容易に見いだすことができる。[26]

（3） 創設期の理念～ベルガーの離脱～

創設期のメンバーたちが共有していた問題意識は，1794年フィヒテがイエナ赴任直後に語った「人間の使命」「学者の使命」であった。「協会」の進むべき道は，フィヒテの理念でもあった。彼は次のように述べている。

「完全性は人間の到達しがたい最高の目標であって，無限に完成していくことが人間の使命である。……青年たちは，再び自分の分野において力強く人類に働きかけ，かれらが自ら得た教養を……広く普及させ，かくて至る所でわれわれの同胞を文化の高次の段階に親切に引き上げることを使命としている。私がこのような青年たちを形成するということは，まだ生まれていない幾百万の人々を必ずや形成するということになるのである。[27]」

この使命を実現するためには，二つの課題が必要となる。

すなわち，「人間性の到達しがたい最高の目標」である無限の「完全性」に向かって，自分自身の教養や道徳性を向上させていくこと。次に，それを広く社会に普及させていくことである。フィヒテの次の言葉は，メンバーたちの共通の理念であった。

「みなさんが高貴で善良であればあるほど，みなさんが遭遇する経験はますます苦痛であろう。しかし，みなさんはこの苦痛によって打ち負かされないで，かえって行為によって苦痛に打ち勝たねばならない。……行動だ，活動だ，これこそはわれわれがそのために存在するゆえんのものである。[28]」

フィヒテの影響を最も強く受けたベルガーは，当時次のようなメモを残し

ている。

「行為が人間を教え，行為が人間を元気づけるのだ，言葉よ去れ！
行為によって自由に自らを勇気づけることのできる人間が，自由な人間なのである。[29]」

また他方フィヒテも，1795年11月８日ワイマールの枢密顧問官フォイクト(Voigt, C.G.)にあてた書簡で，ベルガーを次のように評している。

「ベルガーは，早くから美と善の理念を目指していました。……私はベルガーを信頼しています。彼は，私に学生たちの道徳的な改善が必要であることを要求し，熱心にさせた最初の人物でした。[30]」

ベルガーは，フィヒテの『学者の使命』（四講義）を聞き，「社会における人間の使命」を実現するための自己教育と，その成果を広く社会に普及させることを，学生たちに呼びかけたのであった。「協会」の２回目の会議が行われた1794年６月25日，ベルガーは「協会」の「普遍的な人間の使命」について呼びかけ，メンバーはその目的のために集まり，活動することを呼びかけている。[31]

このようなフィヒテの影響は，1795年に印刷された「協会」の会則に見いだすことができる。

「緊密な互いの結びつきによって，真理と徳に向かう私たちの感情の復活によって，私たちはかの崇高な目標と真理の普及，そして人間性の促進に向かって努力するのである。[32]」

ただ，「協会」の活動の具体的内容に関しては，最初から明確な方向性が初めから存在したわけではなかった。会議録によれば，「協会」の会則が正式に決議されたのは，創設から半年後の1794年12月11日の会議である。その間「協会」の活動をめぐる方向性について，ベルガーと他のメンバーとの意見の相違があった。[33]

先にも述べたように，「協会」の理念を実現させる二つの課題，すなわち自分自身の教養や道徳性を向上させ，それを社会に普及させていくことにつ

いて，フィヒテの理念を最も忠実に受け継いだのが，ベルガーであった。[34]

彼はあくまでも「協会」の活動を，他の学生の意識改革へと働きかけること，さらに市民社会の改革へとつながる実践的な活動と位置づけていた。「協会」で彼が呼びかけた「普遍的な人間の使命」には，フランス革命に影響を受け，社会改革を意識した政治的な一面を持っていたのである。[35]

ただ「協会」の活動は，そこまでの広がりを持つことはなかった。ベルガーはこのことに失望し，新たな会則がほぼ決定した1794年９月30日に「協会」から離れている。その１年後の６月に再び「協会」を訪れているが，２ヶ月後の８月には退会している。この時，シュミットはベルガーの退会理由を表明した書簡に対して，1795年９月17日の会議で次のように述べている。

「(Gesellschaft) 独自の文化への結びつきという目的に限定していたならば，あなたの判断は，まったく別のものになっていたでしょう。自由人という名前は，私たちにとって次のように解釈されています。すなわち，私たちは外見上の制約された個人的交際に縛られることなく自由なのであり，また私たち自身に関する私たちの意見や他の諸々のテーマに対して，互いに正直に意見を述べ合うのです。」[36]

この対立は，「協会」の活動にとって最初の転機となった。すなわち，ベルガーの意見に代表されるような，他の学生たちへ積極的に働きかけ，意識改革を促していくラジカルなグループと，あくまでも個人のアカデミックな生活を目指す穏健なグループとの意見の相違である。

「協会」の活動は，創設期においてこの二つの間で揺れながら，やがて後者の道を歩み始める。ヘルバルトが入会したのは，こうした意見対立を経て「協会」の会則が決定され，活動の方向性が明確になりつつあった時期であった。

３．ヘルバルトの入会

会議録にヘルバルトの名前が最初に登場するのは，1794年10月28日の臨時

会議である。

「次のメンバーの受け入れについて認められた。クラマー（Cramer），ケッペン（Köppen），ウルプレヒト（Ulprecht），ヘルバルト（Herbart），トゥリップリン（Tripplin）。」[37]

同時期にメンバーとして入会を認められたこのメンバーのうち，クラマー，ケッペン，トゥリップリンは，先に述べた文学，神学，美的な領域に関する複数の学生団体にも所属していた。[38]

ヘルバルトのイエナ大学入学は，10月20日であるが，すでに彼は夏頃にはイエナに滞在していた。[39] シュミットは，ヴォルトマンとの昼食会で「将来有望な学生」であるヘルバルトの名前を初めて聞き，ヴォルトマンが「協会」に推薦したと語っている。[40]

その後，1794年11月26日の定例会議で，提出した論文が審査され，正式に加入が認められた。続く12月４日，新たに修正された会則がメンバーに報告された会議で，再びヘルバルトの加入が報告されている。

ヘルバルトの入会の時期は，シュミットとベルガーによる創設の段階から活動の方向性をめぐる意見対立を経て，「協会」の活動の方向性があくまでもメンバーのアカデミックな生活の活性化を重視する方向に固まりつつあった時期であった。やがて彼は，「協会」の中心的な人物として，活発な精神活動を展開していくのである。

＜「自由人協会」に関する基本文献＞

（１） 会議録

Raabe, P.: Das Protokollbuch der Gesellschaft der freien Männer in Jena 1794-1799, in: Festgabe für Eduard Berend zum 75. Geburtstag am 5. Weimar 1959, S.336-383.

（２） シュミットの日記（1794年５月から1795年４月）

Fuchs, E.: Aus dem Tagebuch von Johann Smidt, in: Fichte-Studien 7 (Subjektivität), Amsterdam-Atlanta GA 1995, S.173-192.

（３）「自由人協会」のメンバーによる回想録

① Smidt, J.:Erinnerungen an J.F.Herbart von J.Smidt, 1842, in: J.Fr. Herbarts Sämtliche Werke, hrsg. von K.Kehrbach, O.Flügel u. Th.Fritzsch, 19Bde., Langensalza 1887-1912, 2 Neudruck Aalen 1989, K.1-S.XXI～XXXXVI.
本論文中，引用及び参照したヘルバルトの論文は，すべて上記の全集による。
またその末尾に全集の略号（K），巻数，頁数を示す。
② J.G.Rist in Hamburg aus seinen Lebenserinnerungen, Hamburg 1913.
（4） 伝記
① Meyer, E.H.: Johann Smidt als Student, Candidat der Theologie, Prediger und Professor der Philosophie, 1792-1800, in: Johann Smidt. Ein Gedenkbuch, Bremen 1873, S.39-87.
② Freye, K.: Casimir Ulrich Boehlendorf, der Freund Herbarts und Hölderlins, Langensalza 1913. (Pädagogisches Magazin, Heft 547)

＜註＞

（1） Hölderlin Sämtliche Werke Historisch-Kritische Ausgabe begonnen durch Norbert v.Hellingrath fortgeführt durch Friedrich Seebass und Ludwig v.Pigenot,zweiter Band, Gedichte/Hyperion/Briefe 1794-1798, 1923 Berlin, S.296-297.
手塚富雄ほか訳『ヘルダーリン全集４論文／書簡』河出書房新社 1969年，188頁。

（2） Ziolkowski, Theodor:Das Wunderjahr in Jena.Geist und Gesellschaft 1794/95. Stuttgart 1998.

（3） 手塚富雄ほか訳，前掲書，187-189頁。

（4） Raabe, P.: Das Protokollbuch der Gesellschaft der freien Männer, S.355.

（5） エルンスト・ベーラー著，安田一郎訳
『ロロロ・モノグラフィー叢書 Fr. シュレーゲル』理想社 1974年，48-60頁参照。

（6） 「フィヒテ・クラブ」という名称を前回の論文では使用したが，本論文では「自由人協会」に統一する。

（7） Flitner, W.: Die Litterarische Gesellschaft zu Jena.Eine philosophische Vereinigung der Schüler Fichtes 1794-1799, abgedruckt in: Ders., Studien zur Bildungsgeschichte, Paderborn/München/Wien/Zürich 1985, S.8.

（8） 約50名近くいた「協会」のメンバーの中で，貴族出身者は６名であった。
Vgl. Marwinski, F.: “Wahrlich, das Unternehmen ist Kühn…” Aus der Geschichte der Literarische Gesellschaft der freien Männer von 1794/99 zu Jena,Jena und Erlangen 1992, S.96.

（9） 「協会」で交流のあった友人たちについては，以下の文献で触れている。
拙稿「フィヒテ・クラブとヘルバルト(1)―1790年代後半のイエナの若者たち―」
神戸市外国語大学研究会『神戸外大論叢 第56巻 第４号』2005年９月，63-77頁。

(10) Schlegel/山本定祐訳「アテネーウム断章」Brüder Schlegel/山本定祐ほか訳『ドイツ・ロマン派全集 第２巻 シュレーゲル兄弟』国書刊行会1990年所収，170頁参照。

(11)　大橋良介『絶対者のゆくえ』ミネルヴァ書房 1993年，87頁。

(12)　Johann Georg Rist in Hamburg aus seinen Lebenserinnerungen, Hamburg 1913, S.61.

(13)　18世紀のイエナの学生団体の状況については，例えば以下の文献が詳しい。

Vgl. Marwinski, F.: Johann Andreas Fabricius und die Jenaer gelehrten Gesellschaften des 18. Jahrhunderts, Jena 1989.

Ruiz, A.: Universität Jena Anno 1793/94. Ein jakobinischer Student und Geheimagent im Schatten Reinholds und Fichtes, in:Revolution und Demokratie in Geschichte und Literatur. Zum 60. Geburtstag von Walter Grab, hrsg. von J.H.Schoeps und Imanuel Geiss unter Mitwirkung von Ludger Heid, Duisberg 1979, S.95-132.

Matz, E.: Die Studentenunruhen an der Universität Jena im letzten Jahrzehnt des 18. Jahrhunderts, Jena 1957.

(14)　Smidt, J.: Erinnerungen an J.Fr. Herbart., K.1-S.XXV.

シュミットは続けて，これがゲッチンゲンであれば「ちょっと君，私たちは互いに自己紹介したことは覚えていないのだが…」と見下すように拒否されるだろう，と述べている。

(15)　K.Str.: Die Gesellschaft der freien Männer, in: Der Neue Teutsche Merkur, Weimar 1793, S.105-143.

(16)　K.Str, 1793, S.129.

(17)　Smidt, J.: Erinnerungen an J.F.Herbart. (1842), K.1,S.XX VI.

Fuchs, E.: Aus dem Tagebuch von Johann Smidt, S.173-192.

Meyer, E.H.: Johann Smidt als Student, 1873, S.39-87.

(18)　フリットナーは，「協会」の創設を相談した日付とそのメンバーについて，シュミットの日記を使用している。Vgl. Flitner, W.: Die Litterarische Gesellschaft, S.455. Anm. 7. シュミットの日記の所在は長く不明であったが，Fuchsがその所在を突きとめ，1794年５月から1795年４月までを整理している。

Vgl. Fuchs, E.: Aus dem Tagebuch von Johann Smidt,in: Fichte-Studien 7 (Sub-jektivität), Amsterdam-Atlanta GA 1995, S.173-192.

したがって Asmus と Marwinski は，このシュミットの日記を見ていない。

Vgl. Asmus,W.: Johann Friedrich Herbart-Eine pädagogische Biographie. I. Teil: Der Denker (1776-1809),1968. Heidelberg,S.313,Anm.40.

Marwinski, F.: “Wahrlich, das Unternehmen ist Kühn…”, 1992,S.20,Anm.37.

(19)　メンバーは以下の10名である。このうち Pohrt と Vegesack については，Raabeは「協会」の正式なメンバーとしては認知していない。

Vgl. Raabe, P.: Das Protokollbuch, S.379-383.

①　マイスター (Johann Ludwig Meister, 1773-1844)

②　シュミット (Johann Smidt, 1773-1857)

③　リンダー (Friedrich Ludwig Linder, 1772-1845)

④　シュテッグマン (Ludwig Reinhold Stegmann, 1770-1849)

⑤　ペサロヴィウス (Paul Wilhelm von Pomian Pesarovius, 1776-1847)

⑥　ペレット (Claude-Camille Perret, 1769-1834)

⑦　クリューガー（Wilhelm Georg Krüger, 1774-1835）

⑧　ポールト（Johann Eduard Pohrt, 1765-1835/生没年不詳）

⑨　ベルンホフ（Anton Heinrich Bärnhoff, 1773-1803）

⑩　フェゲザック（Moritz von Vegesack, 生没年不詳）

メンバーの詳細な履歴については，Asmus の詳細な紹介がある。10名のうち，バルト海沿岸の学生は６名（Linder, Stegmann, Pesarovius, Pohrt, Bärnhoff, Vegesack），１名のフランス人（Perret），３名のドイツ人（Smidt, Meister, Krüger）である。

Vgl.Asmus,W.: Johann Friedrich Herbart, Der Denker, S.76/S. 312-313.

またこのメンバーの中で，ポールトはフィヒテの前任者ラインホールの学生であり，シュテッグマン，リンダー，クリューガーの三人は，前年にイエナで創立されていた「自然研究協会」（Naturforschende Gesellschaft）のメンバーであった。

Vgl.Marwinski,F.: “Wahrlich, das Unternehmen ist Kühn…”, S.16-24.

シュミットの日記によれば，わずか３日後の６月４日の晩に，ベルガーとペーターゼンがこの会に参加している。 Vgl. Fuchs, E.:Aus dem Tagebuch von Johann Smidt, S.175.

(20)　Smidt, J.: Erinnerungen an J.F. Herbart.（1842）, K.1—XX III.

(21)　「ヘルバルトの思い出」（Erinnerungen an J.F.Herbart）では，シュミットは自分以外の12名の名前を挙げているが，日記の記述と異なる点は以下の二点である。

①　Perret の名前が欠けている。

②　日記には記載されていない，次の三人の名前がある。Horn, Kaufmann, Pfeiffer.

Vgl. Smidt, J.: Erinnerungen an J.F.Herbart, S.XX IV.

三人とも「協会」の活動に深く関わった人物である。Raabeは，この三人を，「協会」の正式のメンバーとして認知している。 Vgl. Raabe, P.: Das Protokollbuch, S.381.

(22)　石崎宏平『イエナの悲劇』丸善 2001年，88-94頁。

(23)　J.G.Fichte’s Rechenschaft an das Publikum über seine Entfernung von Jena in dem Sommerhalbjahre 1795, in: J.G.Fichte, Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften II, 3: J.G.Fichte, Nachgelassene Schriften 1793-1795, hrsg von R.Layth u.a., Stuttgart-Bad Cannstadt 1971, S.418-419.

邦訳「イェーナ退去の弁明」（1795年）隈元忠敬／井戸慶治訳『フィヒテ全集 補巻フィヒテの生涯』哲書房 2006年所収，17頁。

(24)　バイエルン科学アカデミー版の全集では，この「善を愛する学生たち」のひとりを，ベルガーと指摘しているが，フィヒテはシュミットも念頭においていたはずである。

Vgl. J.G.Fichte’s Rechenschaft an das Publikum uber seine Entfernung von Jena in dem Sommerhalbjahre 1795, S.418（Anm2）.

二人はフィヒテが交流を持った学生の中でも，特に信頼をおいていた学生であり，フィヒテの息子が生まれたとき，シュミットとベルガーは洗礼名の立会人として誕生を祝福している。石崎宏平，前掲書，103頁参照。

(25)　シュミットが「協会」以外に関わった学生団体と，それに参加した「協会」のメンバーは，以下の通りである。

①　Journal Gesellschaft : 1794年８月30日に，Köppen, Breuning, Stegmann が，会則を

提案するために選出されている。

② Theologische Gesellschaft：1794年10月20日，創設に関する会議。10月28日，最初の会議に Cramer, Meister, Köppen, Pesarovius が出席する。出席した学生は12名。11月５日，論文と会則を読みあげる。Möller が参加。

③ Ästhetische Gesellschaft：1794年12月20日に，初めて会議をし，ゲーテの「若きウェルテルの悩み」(?) を読む。メンバーは Bärnhoff, Tripplin, Breuning, Meister, Floret, Smidt の六人である。彼らはすべて「協会」のメンバーである。

④ Allgemeine Literarische Gesellschaft：1795年１月18日に，創設のプランが配布される。約40名の学生が 集まり，Constitution 作成のために10名の学生が選出される。そのうち「協会」のメンバーは，Breuning, Bärnhoff である。

興味深いのは，「協会」が作成した会則の印刷許可をめぐって，「協会」と大学当局 が対立したとき，1795年２月20日に会則に対する意見表名の署名をした学生９名のうち，Allgemeine Literarische Gesellschaft のメンバーが６名もいる。このことは，シュミットを中心にした交友関係を中心に，創設期の「協会」が活動をしていたことを意味している。Vgl. Fuchs, E.:Aus dem Tagebuch von Johann Smidt, S.173-192.

(26) Vgl. Raabe,P.: Das Protokollbuch, S.345-378.

(27) J.G.Fichte: Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften I, 3: J.G. Fichte,: Werke, 1794-1796, hrsg von R.Layth u.a., Stuttgart-Bad Cannstadt 1966, S.32-33.

邦訳「学者の使命に関する数回の講義　第一講」(1794) 隈元忠敬ほか訳『フィヒテ全集・第22巻 教育論・大学論・学者論』哲書房 1998年所収，14-15頁。

(28) J.G.Fichte I, 3: Werke, 1794-1796, 1966, S.67.

邦訳「第五講 芸術と学問が人類の福祉に及ぼす影響に関するルソーの主張の検討」(1794) 前掲書，64頁。

(29) このベルガーの言葉は，Marwinski の調査による。

Vgl. Marwinski, F.: “Wahrlich, das Unternehmen ist Kühn…”, S.62.

(30) J.G.Fichte: Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften III, 2: J.G.Fichte, Briefwechsel, 1793-1795, hrsg von R.Layth u.a., Stuttgart-Bad Cannstadt 1970, S.427-428, : Brief Nr.324.

(31) Raabe, P.: Das Protokollbuch, S.346.

(32) Von der Gesellschaft insbesondere. Abschmitt I. Von der Versammlungen, a) den allgemeinen. §1 (in: Constitution der Literarischen Gesellschaft zu Jena 1795),

in: Marwinski, F.: “Wahrlich,das Unternehmen ist Kühn…”, S.115.

(33) 1795年10月29日，ブロイニングはヘルバルトあての書簡で，「協会」の会則作成にあたってベルガーと対立したことを述べている。彼は，ベルガーの革命的な考えや，「協会」の活動を将来のメンバーの生活につなげていこうとする考えに反対していた。Vgl. K-19, S.69. (Nr.711)

(34) ベルガーは，この時期フィヒテと「協会」の活動方針について協議していたと思われる。1794年７月16日の会議には，次のような叙述がある。

「ベルガーは，協会（Gesellschaft）に対して，フィヒテ教授によって提案された会則の変

更点を公表し，承認された」 Raabe, P.: Das Protokollbuch, S.347.

(35) ベルガーが「協会」で提案した次のテーマに，その痕跡を見いだすことができる。

1794年８月13日「生得的な国家憲法を改善するための国民の義務について」

1794年９月４日「国家の概念について」 Raabe, P.: Das Protokollbuch, S.348, 350.

ベルガーが提出した論文「国家の概念について」は，「協会」最初の公認論文として認められている。Vgl. Raabe, P.: Das Protokollbuch, S.350.

またアスムスは，ベルガーらのラジカルなグループに加えて，ヘルダーリンもそのメンバーに加えているが，筆者はまだその事実関係を確認できていない。ただ，この時期ヘルダーリンはイエナでフィヒテの講義を聴いており，可能性は十分に考えられる。Vgl. Asmus, W., Der Denker, S.76.

(36) Raabe, P.: Das Protokollbuch, S.350.

ただベルガーは，1797年11月１日に再び「協会」に入会し，1798年３月21日に退会するまで「協会」で活動を続けている。Vgl. Raabe, P.: Das Protokollbuch, S.379.

(37) Raabe, P.: Das Protokollbuch, S.350.

(38) ケッペンは「Journal Gesellschaft」「Theologische Gesellschaft」のメンバーであり，クラマーは，「Theologische Gesellschaft」のメンバー，トゥリップリンは，「Ästhetische Gesellschaft」のメンバーであった。前述の註(25)を参照。

(39) ヘルバルトの全集を編纂した Kehrbach の註を参照。

Smidt, J.: Erinnerungen an J.F.Herbart. (1842), K.1-S.XX III, Anm. 1.

(40) Smidt, J.: Erinnerungen an J.F.Herbart. (1842), K.1-S.XX VII.